

# 書評

## 「日本の哲学」(Japanese Philosophy) について

——『エンサイクロペディア・ブリタニカ』(一九七四年版)——

夜久 正雄

### (一)

エンサイクロペディア・ブリタニカ (Encyclopedia Britannica) 一九七四年版ジャパン (Japan) には、次の項目順の記載がある。「日本哲学」(Japanese Philosophy) はその一つである。

Japan, History of — Japan, Sea of(日本海) — Japanese Language — Japanese Mythology —

Japanese Philosophy — Japanese Religion

ジャパニーズ・フィロソフィー (Japanese Philosophy) は冒頭に次のやうに(拙訳)述べてゐる。

“フィロソフィーの同義語は“哲学”である。この言葉は、あの大激変・明治維新レストレーション(一八六

八) 以後、西洋思想のさまざまな学派が始めて日本に紹介された時に鑄造(コイン)された言葉である。

その大激変は(二五〇年にわたって日本を支配した)幕府を倒して王室の治世を復活し西洋に対して開国したのである。明治時代以前、日本思想の二大学派の一は仏教(Buddhism)から起つて、極めて宗教的性格に染められ、しばしば形而上学的メタフィジカルであった。第二の学派は儒教(Confucianism 孔夫子教)から起つて、本質的に道徳哲学の体系であった。十八世紀以来、これら二大学派に対する批判的な独立思想家が何人かあった。明治維新以後、これら諸学派ならびに思想家のすべての哲学は、共通してともに「哲学テツガク」の名で分類されてゐる。二十世紀になると西洋哲学の影響が知識階級の間で決定的になった。しかし神道(Shinto)、佛教、儒教の伝統的な思维方法は国民の間でなほ一般的である。”

そして、次に第一に「初期の哲学的思维」の一として「日本における哲学の発生」をあげ、その一に「聖徳太子の佛教」をあげる。

以下ブリタニカの筆者は、第二に「鎌倉室町時代」、第三に「江戸時代」、第四に「近代哲学の時代」とつづけ、その最後をつぎのやうに括つてゐる。

“ほとんどすべての日本の大学にあつて、イマニエル・カントとG・W・F・ヘーゲルの作品が、哲学を学ぶ学生に対してほとんど必読文献と指定されてゐる。しかしながらマルクスの正当化を公式化するために努力してゐる日本の知識人は多い。さらに、何人かの思想家があつて、彼等は伝統的な日本思想を今日の文明の中で同時代的な意味をもつレベルにまで高めようと努力してゐる。東と西の哲学の問題は、何人かの知識人たちにとっては重大な関心事であつて、彼らは彼ら自身の伝統と、移入した西洋文明ならびに左翼主義者の扇動との対決に悩ま

されてゐる。右の中ほどの哲学を、二十世紀中期以降の時代の指導的哲学として、歴史が見なすかといふことを一つに決めることは、現在においてはむづかしい。”

筆者はH・Naとあるから、中村元博士であらう。

なほ分りやすくするためにこの項目でとりあげられてゐる人物名をあげると次の通りである。

聖徳太子（最初の哲学者）、最澄（天台哲学）、空海（真言哲学）、鎌倉時代の佛教哲学として、法然・親鸞（浄土教）、日蓮（日蓮宗）、栄西・道元（禅宗）、慈円（歴史哲学）、室町時代の一条兼良・卜部（吉田）兼俱（神道哲学）。

江戸時代。新儒教三学派——藤原惺窩、林羅山（朱子学派）、中江藤樹・熊沢蕃山・大塩平八郎（王陽明学派）、山鹿素行・荻生徂徠（古学派）伊藤仁斎・東涯父子。神道復活——契沖・賀茂真淵、本居宣長。新仏教思想家——沢庵、鈴木正三、天慶、慈雲。心学派——石田梅巖。独立哲学者たち——富永仲基、太宰春台、三浦梅園、安藤昌益、二宮尊徳。

近代哲学の時代——明治時代。加藤弘之（進化主義哲学）、福沢諭吉（啓蒙主義哲学）、中江篤介・兆民（社会思想家）幸徳秋水（平民主義）高山林次郎・樗牛（個人主義）、井上円了（汎理論主義）井上哲次郎（現象主義）田中王堂（プラグマティズム——理想主義的実験主義）、三宅雪嶺（社会政治学）。

大正昭和時代。輸入ドイツ哲学ならびにキリスト教哲学——左右田喜一郎（リッケルト学派・経済哲学）桑木巖翼（カント学派）波多野精一（キリスト教哲学）。固有の創造的哲学——西田幾多郎、田辺元、和辻哲郎。

右の人物をみな「日本の哲学」として扱ったのである。

## (二)

ジャパニーズ・フィロソフィー、「日本の哲学」あるいは「日本哲学」といふ言葉は、「中国（シナ）哲学」（『広辞苑』）とか「インド（印度）哲学」（『同前』）といふ言葉があるので、何ら不思議はないと思はれる。しかし、実際には、ほとんど使はれなかった。「哲学」と言へば西洋（欧米）哲学を言ひ、せいぜい中国哲学、インド哲学の存在が論じられる風であつて、「日本哲学」はその存在が認められなかったのである。

このエンサイクロペディア・ブリタニカの日本語版と言へるのではないかと思ふが、『ブリタニカ国際大百科事典』（BRITANICA INTERNATIONAL ENCYCLOPAEDIA）（ティビーエス・ブリタニカ一九七四年版）では「日本の哲学」の言葉は使はれず「日本の思想」となつてゐる。この項目の筆者は、特質（相良亨）古代・中世（田村芳朗）近世（相良亨）近代（生松敬三）となつてゐるので、内容も異るのは勿論であるが、項目名としても意識して「哲学」の語を避けたのであらう。

「日本の哲学」といつても「日本の思想」といつても同じではないか、と言へば言へないことではないのであるが、「日本の哲学」といふ言葉を避ける背景には、「日本には哲学はなかった」とか、「日本思想は哲学とは呼べない」といふ考へがあつたのかと思はれる。

日本の大学の学科目の中に「哲学」といふ科目があるが、そこで教授される内容は、ほとんど西洋哲学であり、せいぜい日本の近代哲学として西田幾多郎、田辺元の哲学などが取り上げられるにすぎない。日本の大学の「哲学」科では日本思想・哲学はほとんど問題にされなかったのである。大学の学科として「日本思想史」学科をも

つのも東北大学と大阪大学の二校のみであるらしい。これは、「日本思想」が日本のアカデミーにおいていかに軽視されたかを語ってゐる。

「哲学」といふ単語は前に引用した英文ブリタニカの解説にある通り、フィロソフィーの訳語として明治時代に新らしく「鑄造」された言葉である。西周がはじめ「希賢(哲)学」と訳し、省略して、「哲学」と訳した。彼はかう書いてゐる。(原漢文)

「本訳中ニ称スル所ノ哲学ハ、即チ欧州儒学也。今、哲学ト訳ス、以テ之ヲ東方儒学ニ別ツ所也。此ノ語、<sup>モ</sup>原ト斐魯<sup>フィロソフイ</sup>蘇非ト名ヅク。希<sup>ギリシヤ</sup>臘語斐魯ハ求ノ義、蘇非<sup>ソフィア</sup>ハ賢ノ義、哲学ヲ求ムルヲ謂フ也。」(J.S.ミル著『利<sup>西</sup>学』一序・訳利学説)の冒頭、原漢文。『英国弥留氏原著、大日本西周訳述』東京・掬翠楼蔵版、明治十年。<sup>註</sup>

英和辞典でPhilosophyを引くと、ギリシヤ語のPhilosophiaが語源で、原義はLove of wisdomとある。フィロPhiloは「愛すること」で、ソフィーはソフィアと同じで智・賢wisdomであるから、フィロソフィーとは「智・賢を愛すること」といふ意味になる。フィロソフィーは「愛智」である。西周が最初「希賢学」と訳したといふ「希」は「願ふ」とか「求める」意味があるので、「愛智」の代りに「希賢」としたのである。「賢」を「哲」としたのは、これは同義語であるが、「希賢学」より「希哲学」の方が舶来らしくてふさはしいと考へたからであらう。

「ソフィー」に当る「智」は仏教語で、「知」とは区別して使はれる。「知」は一般の分別・判断・認識の作用、「智」は高次の宗教的叡智の意味に用ひる。、『広辞苑』とある。「智」は「叡智」「智慧」の意味である。「智慧」をまた『広辞苑』で引くと、「②(仏)(梵語Prajña般若。(普通「智慧」と書く)真理を明らかにし、悟りを

開くはたらしき。宗教的叡智。六波羅密の第六。また「慈悲」と対にして用いられる。」とあり、③ (Sophia Wisdom) 四つの元徳の二。」とある。ソフィア・ユニバーシティーを「上智大学」と訳すわけである。つまり梵語のプラジアナを中国で音をとって「般若」と漢訳し、意味をとって「智」と漢訳したのである。日本に伝はったのは漢訳仏典であるから、宗教的叡智を「智」としたので、「ソフィア」と「智」は同義語である。佛教語としての「智」は儒教で言へば「賢」である。

ともあれフィソフイーは「愛智学」「求智学」「希賢学」「希哲学」さらに言へば「求道学」の意味であることに問題はない。一国の文化にこれが無いとしたら大変なことになる。

西周が「哲学」を「欧州儒学」としたといふことは、「哲学」と「儒学」とを同義語としたのである。「儒」は「賢人」の意味であるからこれも納得される。

小林秀雄は次のやうに言っている。

「西周のこの（荻生徂徠による）開眼を、希哲学的な開眼と呼んでも、少しも差支えないだろう。ヒロソヒの新しい種は、希哲という自分の心の上壤に播かれたとは、彼には解り切った話であった。彼は、やがて希哲学の希を略して哲学というようになったが、心の上壤がある限り、彼には、別段仔細はなかつたであろう。だが、言葉の方は、希が略されて、哲学という不具者になってさまよい出したという次第であった。……要するに、何時の間にか、哲学から人間が紛失してしまったらしい。ソクラテスという「希哲学の開基」は、「吾が孔子」に比すべき大人であるという西周の言葉の難駁を言うより、彼の精神のうちで、両者は、恐らく極く自然に結び付いた事を想う方が有益ではなからうか。」（小林秀雄『考えるヒント2』所載「哲学」）

西周にとってはソクラテスも孔子も徂徠もみな「希賢学」即ち「哲学」者であることに変わりはない。

明治時代初期の哲学者——西洋（欧米）哲学の研究者の多くは、儒教シナ哲学・佛教インド哲学についての教養が深かったから、西洋哲学と儒教・佛教との本質的な一致点について疑ふことはなかった。

「哲学」が「賢哲を学ぶ」意味とすれば、「儒学」は中国における「哲学」であり、佛教はインドにおける「哲学」と呼んで何ら不思議はなかった。したがって日本の儒者も佛教家も哲学者と呼んで差支へないはずである。

明治の哲学者・井上哲次郎は『日本陽明学派之哲学』（一九〇〇）とか『日本古学派之哲学』（一九〇二）『日本朱子学派之哲学』（一九〇三）といふ著書を出してゐる。江戸時代の儒者の「哲学」を論じたのである。

### (三)

ところが明治の中期になると、「日本には固有の哲学はない、あったとしてもそれは儒教や仏教の焼き直しにすぎない」といふ考へが一般化するやうになった。

明治十九年十一月五日元田永亨（侍講）の謹記した「聖諭記」といふ文章があるが、これによると、明治天皇は同年東京帝国大学に行幸され、諸学科を巡視なさつて、次のやうなことに御氣付きになられたといふ。

「理科・科学・植物科・医科・法科等ハ益々其進歩ヲ見ル可シト雖ドモ、主本トスル所ノ修身ノ学科ニ於テハ、曾テ見ル所ナシ。和漢ノ学科ハ修身ヲ専ラトシ、古典講習科アリト聞クト雖ドモ、如何ナル所ニ設ケアルヤ過日觀ルコト無シ。抑大学ハ、日本教育高等ノ学校ニシテ、高等ノ人材ヲ成就スベキ所ナリ。然ルニ今ノ学科ニシテ政治治安ノ道ヲ講習シ得ベキ人材ヲ求メムトスルモ決シテ得ベカラズ。……故ニ朕今徳大寺侍従長ニ

命ジテ渡辺総長ニ問ハシメント欲ス。渡辺亦如何ナル考慮ナルヤ……」

天皇が大学（当時唯一の大学、東京帝国大学）総長に詰問されたことの当否は、明治憲法制定以前のことであるから今措くとして、渡辺洪基総長の答へは次の通りであったといふ。

「支那の易経、印度の仏教の如きは哲学といはれるが、日本には固有の哲学は無い」

これが当時唯一の大学の総長の言集であった。<sup>註2)</sup>

また『古事記』を英訳した日本学者東大教師のB・H・チェンバレンや中江兆民なども同じやうな意見であった。

チェンバレンは『日本事物誌』(Things Japanese)「哲学」の項の中でかう言つてゐる。

「日本人は未だかつて自分自身の哲学を持つたことがない。昔彼らは孔子や王陽明の聖堂の前に額づいてゐた。今では彼らはハーバート・スペンサーやニーチェの聖堂の前に額づく。」（高梨健夫氏訳）「日本の哲学者（と称される人びと）は、外来思想の単なる解説者にすぎなかった。」（同前）

しかし、彼は、日本におけるほとんど唯一の独創的哲学者として福沢諭吉をあげてゐる。また、「儒教」の項目で、「旧式哲学者」として、仁斎、東涯、白石、徂徠をあげてゐる。したがって彼の考へは、一言で「日本に固有の哲学はない」といふやうなものでもなく、また西洋哲学だけが哲学であるといふ狭い考へでもなかった。<sup>註3)</sup>しかしその影響は大きかったらう。

中江兆民は次のやうに言ふ。

「わが日本、古来より今にいたるまで哲学なし。本居宣長や平田篤胤などは、古い御陵をさぐり、古いことば



を研究した一種の考古学者にすぎない。天地性命の原理にいたっては、およそわかっていない。伊藤仁斎、荻生徂徠などは、中国古典の説に新解釈を出したことがあるとはいえ、要するに古典学者にすぎない。ただ、仏教の僧のなかで、創意を発揮し、新しい理論をつくりあげたものもないではないが、これとて、結局は宗教家の範囲にとどまり、純然たる哲学ではない。

最近、加藤弘之、井上哲次郎などは、みづから哲学者と名のつており、世間もまたそれを認めているようだが、実際は自分が勉強したヨーロッパの人びとの論説をそのまま輸入し、いわゆる「崑崙に箇の棗を吞む」にすぎず、哲学者と称するに足りない。」

西洋哲学の研究家だけを「哲学者」と称すること（これは今日まで続いてゐる。——東京書籍刊『現代日本哲學家思想家辞典』など）に兆民が苛立ったのは無理もない。しかし江戸時代の国学者、儒者の「天地性命の原理」（自然と人生についての原理）追求の精神、その「希哲学」を一括して否定してしまふのは、彼らの著述の外面だけを見てその内容を見なかった故であらうと思はれる。また、獨創性を認めた「仏教の僧たち」といふのは、鎌倉仏教の祖師たちを言ったのであらうが、これも著作の内面を見ない、ただ外形からの判断にすぎないものと思はれる。この点についての批評は、内野吾郎・戸田義雄共編『民族と文化の発見』所載、戸田義雄博士論説「民族の精魂」に示されてゐる。<sup>(4)</sup>

西洋文明に対する憧憬の感情は、自然に自国文化に対する卑下の感情を生み出す、これが昂じて白虐的心理に陥るのは、人心の一面である。さういふ心理からであらう、明治時代中期に自国の文化伝統を否定する説が一部知識階級に行はれた。日本の文明・文化は外国の文明の模倣にすぎないといふ自意識が逆転して自国の文化伝統

の否定につながったのであらう。そこで文化価値の高い「哲学」は欧米諸国にある学問のことで、日本にはさういふ学問が無かった、と決めてしまったのである。

大学の総長から始めて日本の日本学の権威ならびに進歩的社会思想家たちが、「日本には固有の哲学はない」といふのであるから、そして大学で日本哲学は教へられないのであるから、知識階級が同調したのも無理はない。かうして大正から昭和にかけて、日本の大学の学科目の「哲学」は、ただ欧米哲学の紹介祖述にとどまり、日本固有の学問・哲学に関する研究は、アカデミックな世界からは排除されてしまった。

さらに、固有文化を唯物論的革命史観によって普遍化しようとするマルクシズムの流行が、固有思想の価値を無視する結果、日本思想に対する軽視が増幅されたのである。（三枝博音の「日本哲学」などは例外である。）敗戦はかうした傾向を一層過激なものにしてしまった。

しかし、またかうした傾向に対して、固有の日本思想についての研究も次第に行はれるやうになったきた。

日本思想が仏教、儒教の模倣及至は焼き直しにすぎないとする理由の一つに、古代文献の多くが殆んど漢文で記されてゐることがあったと思ふ。

ところが、鎌倉仏教の祖師たちの思想は、みな国語で表現されてゐる。法然の「和語灯録」親鸞の「歎異抄」、道元の「正法眼蔵」、慈円の「愚管抄」等。

かうした著述はとても儒仏思想の模倣とも焼き直しとも言へない、日本の国の歴史と社会とに根ざして独自に生れてきた固有思想であり、社会生活にも大きな影響力をもつものであった。これを「哲学」と呼ばないわけにはゆかなくなつた。

「道元の哲学」とか「慈円の歴史哲学」とかいふ言葉を、西洋哲学を祖述する日本の哲学者たちが使ふやうになった。田辺元著『正法眼蔵の哲学私観』(一九三九)和辻哲郎の『日本精神史研究』(一九二六)『続日本精神史研究』(一九三五)『日本倫理思想史』全二巻(一九五二)が現はれて、日本思想哲学の存在が明らかにされた。中村元氏の「日本哲学」(Japanese Philosophy)の用語の使用はこの系列に根ざすものであらう。

小林秀雄の「日本への回帰」ともいふべき著作『考えるヒント』1・2・3・4の中の日本の思想家に対する研究ならびに『本居宣長』などは、日本思想の権威を内外に示したものである。

「考えるヒント」に登場する内外の思想家哲学者の名は次の通りであつて、「日本の哲学」「日本の思想」近世以降項目に出てくる人物とはほとんど同じである。

『考えるヒント』1 (プラトン・ソクラテス・本居宣長・福沢諭吉) 2 (山鹿素行・熊沢蕃山・伊藤仁斎・荻生徂徠・西周) 3 (兼好・ドストエフスキー・明恵・釈迦・宮本武蔵・ベルグソン・宮尊徳・ニュートン・アインシュタイン・吉田松陰) 4 (ボードレール・ランボオ)<sup>(註)</sup>

小林秀雄の「希哲学」にあつては、内外の哲学者を区別することのなかったことがよくわかる。

#### (四)

なほ英文ブリタニカの「日本哲学」の内容と日本語版国際ブリタニカの「日本の思想」の内容とは、筆者が異なるので登場人物にも多少の違いがあるのも当然であるが、特に大きな違いが二つある。

一つは、聖徳太子についての考への違いである。英文ブリタニカは、聖徳太子を日本最初の哲学思想家として、

その哲学の創造性を『三経義疏』の思想にふれて説明するのに対して、日本語版国際ブリタニカは、太子作の『三経義疏』及び「世間虚仮・唯仏是真」の言葉等「聖徳太子に関する事柄のすべてに対して、種々の角度から疑問が投ぜられており、思想的な角度からも検討を要するといえよう」として、太子思想に関する文献の信憑性に対する不信の感情を示してゐる。これでは太子の思想を論ずることはできない。これは日本の歴史学ならびに思想史学の一方の見解（学会における支配的な見解）を示してゐることにはなるが、これは津田左右吉博士の文献批判学の影響下にあるものであって、最近梅原猛氏の古代史学によってその誤りが指摘されてゐる。ともあれ、聖徳太子についての抜ひ方が大きく二つに分れてゐる。『三経義疏』も「十七条憲法」も『日本書紀』の太子記事の多くも疑ふといふのでは、太子研究は成立しないのが当然であらう、これは大正・昭和の実証主義史学の偏執と固有文化否定の左翼史観とが生み出した大きな誤りではあるまいか。

次は、「近代」の項の「大正末期〜第二次世界大戦前期」の代表的哲学者についての見解である。

国際ブリタニカがマルクス主義の哲学者の三木清をあげるのに対して、英文ブリタニカは和辻哲郎をあげてゐる。これは、西田・田辺哲学から現代日本思想哲学へとつづく接点をなすものであって、英文ブリタニカが共産主義を激しく批判した和辻哲学をあげたのに対して、国際ブリタニカはマルクス哲学者三木清をあげたのである。戦後・二十世紀後半の日本の思想哲学はある意味では、英文ブリタニカの筆者の言ふ通り西洋哲学派とマルクシズムと東と西との哲学の融合を志す哲学との二つ巴の思想の戦ひとも見ることが出来る。その意味で、現代日本の哲学の主流として、マルクシズムをあげるか和辻哲学をあげるかは、筆者自身の哲学を示したことにならう。これが第二の重要な相違点である。

註(1) 『欧米名著邦訳(明治)集——文献資料集——』(小田村寅二郎編)五、「J・S・ミル著「利学」」(浜田収二郎)

——国民文化研究会、昭和四十五年第二刷)

註(2) 拙論「現代流行思想とその批判」(『日本への回帰』第13集(国民文化研究会刊・昭和五十三年))

註(3) 拙論「日本思想とB・H・チェンバレン、和歌、その他」(昭和四十六年十月、亜細亜学園同窓会誌青々論壇)(『年々歳々』所載)

註(4) 戸田義雄氏「諸民族の精魂(白国文化認識にあらわれた自虐性と他虐性)」(内野吾郎・戸田義雄共編『民族と文化の発見』大明堂昭和五十三年刊)

註(5) 『考えるヒント』(1)・2・3・4 (1)は標示なし。中公文庫、(1)の原文は昭和三十四年から三十七年へかけて『文芸春秋』に発表とのこと)